あぶくまゆ

ハレーすい星接近から三年過ぎ、静かだった県内の天界がまたざわめいてきた。二十二日に火星が十七年ぶりに地球から五千五百万キロまで大接近、それも今世紀最後とあっては当然。いわき市では、これに夢あふれる天体の話題が加わり、一層宇宙へのロマンをかきたてている▼あす十七日には平市民会館で第三十次日本南極観測越冬隊長に選ばれた江尻全機氏を励ます会が開かれる。平一小、平一中、磐城高の同級生たちが十一月の出発前に激励会を企画したが、市民各層からの要望で全市的な集いに発展。江尻隊長も講演会を快く引き受け、オーロラや南極の自然を話すことになった。めったに聴けない話だけに小中学生や市民の関心を集めている▼もう一つは、田人町の山中に完成した二十五坪足らずの「いわき天体観測所」。東京に住む田中政明さんら星の好きな二十代から六十代までのサラリーマン・主婦など二十人が資金を出し合い、労力奉仕して建設、十一月六日、正式開所出来るまでにこぎつけた。光害のない真っ黒な空を求め、全国を歩き回って見つけた理想の地だという▼いわき市は昨年、環境庁のスターウオッチング星空の街コンテストで全国四つの「あおぞらの街」に選ばれた。田中さんらが白羽の矢を立てた訳だ。いわきにも市立の天体観測施設はある。だが専門指導者が少ない。それを知ってかどうか田中さんらは「一緒に星降る空を見ませんか」と語る。市民ぐるみで〝宝〟を使いこなせれば「観測のまち・いわき」も夢ではない。

1988. 9/16付（福島民報）